

山と博物館

第40巻 第12号 1995年12月25日

大町山岳博物館



真冬待つ木々 撮影 峯村 隆

髭が白くなったって

小林 明

生意気で恐れを知らない浅はかな二十代の頃、外国語もしゃべれぬまま一人旅に出た。リュックを背負い、憧れのヨーロッパへ、そしてインドを貧乏旅行した。おおむねユー・スホステルか安ベンションに泊った。あちこちの宿舎で、髭の白くなった五、六十代の、一人旅のアメリカ人に何人か出会った。彼らはリュックを背に、はき古した靴を履き、野球帽かカーボーイハットを被り、地図を片手に、にこやかにもう一方の手を上げて去って行くのだった。あの年齢になって、あのようになんとかに気の向くまま一人旅に出るとは、なんと素敵なことか。その精神の自由さと、好奇心の旺盛さと、気力と体力に感嘆した。今年の夏、サンフランシスコから二百キロ南のビック・サーへ、写真家ビルを訪ねた。一九八〇年に八十八歳で亡くなった文豪ヘンリー・ミラーの、親しい友人中の唯一の現存者で、髪も髭も白く七十五歳は優に越えている。国道から山へ入ること車で十五分、曲がりくねった坂道を登り切った眺望。環境抜群しかし不便極まりない山中に住む。周辺見わたせるところに人家なし。あまり広くない木造りの素朴で明るい家にただ一人で住む。今も写真を撮り続け、年一、二度は海外へ出かけ、ここ数年エジプトの遺跡群を撮り続けているという。

アメリカという国には好き嫌いがあるだろう。しかしアメリカ人のもつ類まれな好奇心、底知れぬエネルギー、群がらず我が道を行く自由と独立の精神は、建国以来今もこうして健在である。個々に出会うとそれは激しく胸をうつ。

昨年十数年ぶりにユー・スホステルの会員に再登録した。新しいリュックも買った。はき慣れた靴もある。髭も白くなり、かつて感激した旅人と同世代となった。春にはしばらく旅に出た。冬の初めにはそぞろ旅に出ようとカレンダーを毎日眺めている。私がアメリカ人から学んだ最良の精神を大切にしたい。

(山岳博物館協議会委員)

ニホンカモシカの生息状況と

伝染病の現状

小林 毅

東京都奥多摩地域のニホンカモシカはいつごろから生息していたのであろうか？ かなり昔から生息していたのであろうが、文献などを見ても定かではない。全国的にも「幻の動物」と冠されていたように、奥多摩地域でもめつたに出合うことができない獣であったに違いない。今でこそ、ある場所に訪れればニホンカモシカを観察することができたり、時折登山者が見かけたり、死体が発見されることがあるが、それにしてもまだまだ関係者

以外の人にとっては「まぼろし」の存在である。確たる数字ではないが、東京都民の九五％は、奥多摩地域にニホンカモシカを始めツキノワグマやニホンザルが生息していることを知らないというのが現状であろう。

奥多摩地域概観

都心からJRで二時間もあれば訪れることができる地に奥多摩はある。中心地である奥多摩町は面積が二二五・六平方キロメートル、都心に最も近い国立公園、秩父多摩国立公園に全域が含まれている。その北側には埼玉県、西には山梨県、南には神奈川県と山続きであり、都県の境を越えて連続していることが奥多摩の自然の豊かさを支えている。

奥多摩地域はほとんどが山であり、地形は急峻である。最高峰の雲取山(二、〇一八メートル)を頭に、一、〇〇〇メートル級の山々が連なっている。雲取山頂周辺にはコマツガとシラビソの亜高山帯林が広がり、少し下るとウラジロモミヤブナ、ミスナラの林が見られる。しかし、山林の五〇％以上はスギやヒノキの人工林である。

水系としては、多摩川、日原川が地域を割って流れており、一九五七年に竣工した奥多摩湖(小河内ダム)が満面に水をたたえている。このような環境に、四十一種類の哺乳類が生息しているのである。

野生動物の調査のはじまり

私が奥多摩地域の野生動物の調査を始めたのは、一九八四年に御岳という所に自然解説員(インタープリター)として勤務したことがきっかけであった。当時、奥多摩にニホンカモシカが生息していることはわかってはいたものの、どの範囲にどのような生息しているのか、等といった状況を詳しく知ることができなかった。

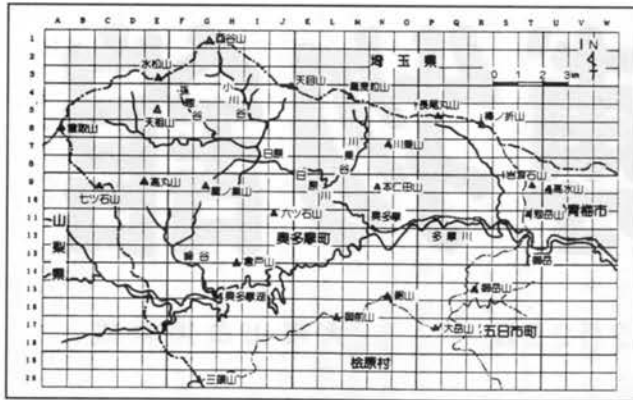
そこで、ボランティアグループの、かもしかの会東京のメンバーと協力して、現地調査に入るとともに、地元の関係者の方々に聞き取りやアンケート調査を始めたのである。その後毎年同様の調査を継続して行っており、いくつかの知見を得ることができたので、紹介したい。

調査でわかったこと(分布等について)

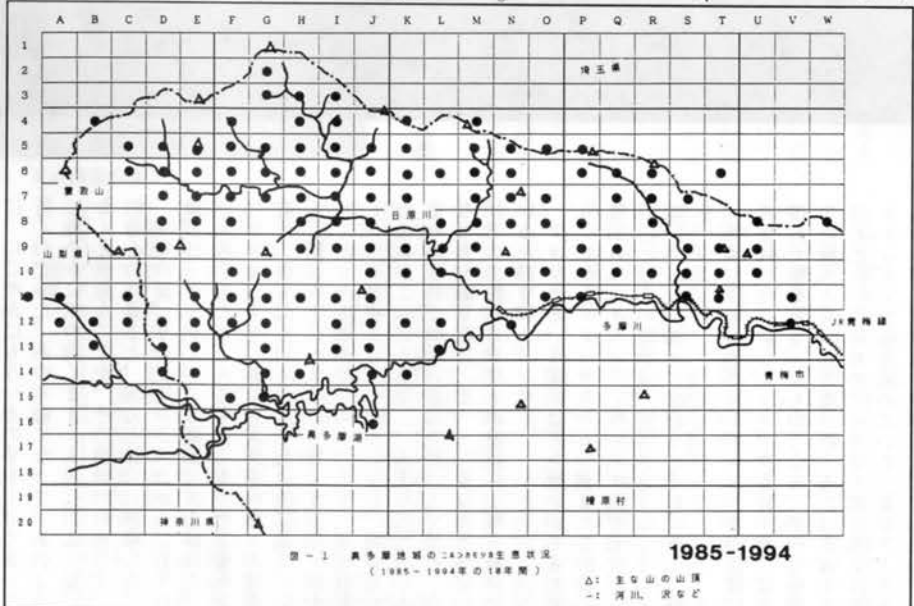
一九八五年度から一九九四年度までの調査結果をもとに、生息が確認できた場所を一キロメートルのメッシュ図に示した(図一)。

- ・多摩川の北側に分布している。
- ・埼玉県(北側)と山梨県(西側)に分布

- ・幼令植林地、がれ場、採石場周辺で密度が高い。



調査地域概観図



図一 奥多摩地域のニホンカモシカ生息状況

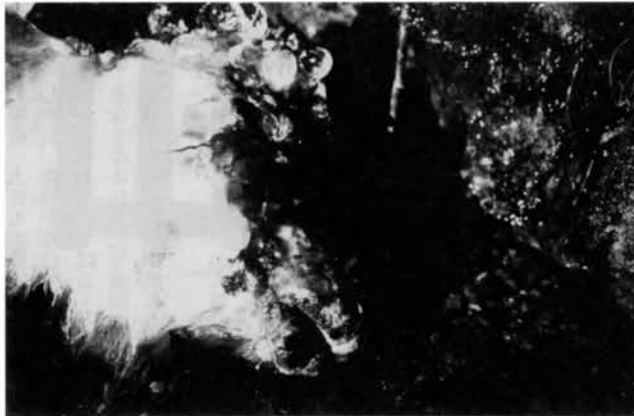


写真-1 パラボックスウイルスの症状のあるニホンカモシカの死体

・雲取山周辺（おおよそ標高一、七〇〇メートル以上の場所）ではほとんど確認されない。

また、現地調査では主に定点調査を実施しており、個体数密度や食性などの生態、行動などを調べてきた。密度に関しては、定点調査の場所を確認できた密度に分布域の面積をかけあわせてみると、四百五十頭という数字が導き出された。密度の小さい場所を考え合わせると、奥多摩地域のニホンカモシカの個体数はおおよそ三百頭という見積りが妥当かと考えられる。

分布域が拡大してきた？

奥多摩地域では、ニホンカモシカの生息地

域とほとんど重なってホンシユウジカが生息している。調査開始当初、猟師の方々からの聞き取りで、ホンシユウジカは多摩川の南側にも生息しているという情報はあったが、アンケート調査では一九九〇年になって初めて多摩川の北側に生息が確認され、その後確認記録は急増してきた。一九九一〜一九九二年頃になって分布域として定着してきたものと考えられる。

これと比べて、ニホンカモシカの方は、多摩川の南側の記録は全くない状態であったが、一九九四年のアンケート調査の結果で初めて多摩川の南側の確実な報告が記録された。一九九五年初夏には、檜原村で相次いで二件の目撃報告があり、ホンシユウジカが拡大したのと同じ地域に分布域が広がったのではないかと注目しているところである。

ちなみに、ここでは詳しくは述べないが、奥多摩地域に生息しているニホンザルについても群れの個体数が増え、今年度にいたって顕著に遊動域も広がりがつあり、群れが分裂して新たな分布域をつくるのではないかとみられている。ニホンカモシカ等と同様に今後の動向が気になるところである。

カモシカに流行（はやり）の病気が！

これまでに、秋田県などで、ニホンカモシカの口に潰瘍ができる伝染病がはやって、奥多摩地域では一九九三年一二月に初めて同様の症状のある死体が確認された（写真-1）。この伝染病は、パラボックスウイルスによるもので、口唇や舌・乳房・外陰部・蹄間腺などの部分に、膿疱（うみ）を伴った病変が認められる。このウイルスは自然の中の耐性が強く、伝搬力も非常に強いウイルスで、

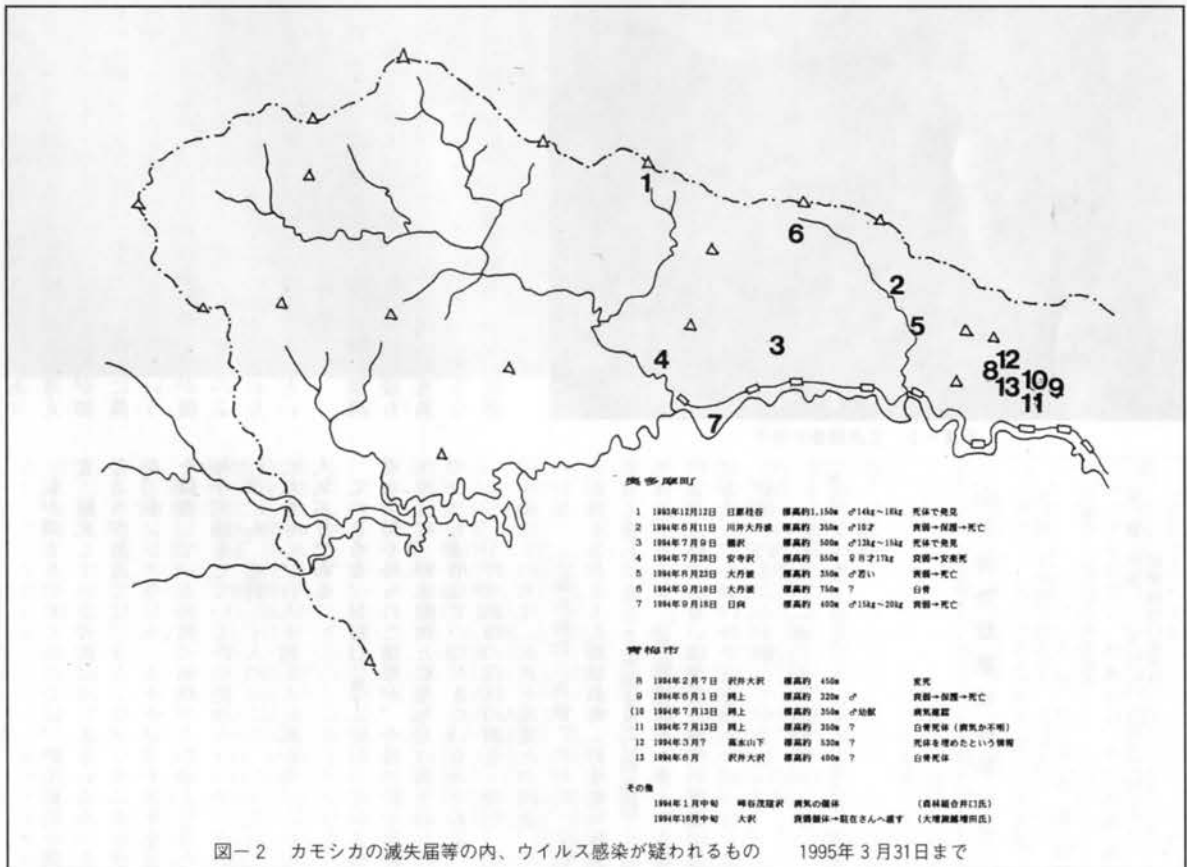


図-2 カモシカの滅失届等の内、ウイルス感染が疑われるもの 1995年3月31日まで

カモシカや家畜、人にも感染する病気がそうである。しかし、動物が死亡するのはこのウイルス感染が直接の要因ではなく、病変のため採食できなくなるなどして衰弱するらしい。体力の弱い個体や若い個体が死んでしまうという。

奥多摩町や青梅市でも一九九四年度になって相次いでパラボックスウイルスに感染した(病変のある)ニホンカモシカの死体が確認された(図1-2)

伝染病その後

パラボックスウイルスによる伝染病は、一九七六年に秋田県で発生したのを始めとして、その後青森・岩手・宮城・福島県など東北地方に蔓延し、続いて群馬・栃木県に広まった。一九八四年には岐阜・長野・新潟県でも病気が発生し、一九九四年には兵庫・滋賀・埼玉県などでも確認されている。

病気の発生は一年ほどで落ちつくよう、各県とも多少の個体が死亡したものの、いずれもおさまってきている。

東京都の場合も同様で、図に示した十三件の内、白骨死体で見えられた三件を除いた十件が、確実に病気が原因で死亡し確認されたものである(山中で死亡した個体数を加える)と実際にはもっと多くなるものと思われる。これらは、一九九四年六月から九月に集中して確認されており、その後は終結に向かった。一九九五年に入ってから、五月に奥多摩町で一件が確認されただけで、十一月までは報告がない状態である。

東北地方では、一九八九年に再度病気が発生した。パラボックスウイルスは家畜がもたらしたと考えられようが、一度野生動物に発

生した以上自然界の中で生き残り、今後周期的に発生することが予想される。ニホンカモシカを絶滅に追い込む直接要因とはならないようだが、このまま放っておいてよい、ということもあるまい。

野生動物救護獣医師協会の話では、このパラボックスウイルスの型が究明されておらず、調査費もない状態(家畜などのような産業に関わるものとは異なるので、役所の方で研究費をつけてくれないとのこと)なので、対応の方策も練りようがないとのことをおうかがっている。

抜本的な対策をたてるために!

先にふれた、奥多摩地域での野生動物の分布域の拡大は、私たちが日常生活している生



写真-2 観察会の様子

活園(農地・住宅地)へ向かう以外にはありえず、当然今後さまざまな摩擦の発生が考えられる。ニホンサルにいたっては、群れが初めて遊動してきただけであるのに(確かに農作物には被害があったらしいが、何という迅速さであろう、有害鳥獣駆除の申請が提出・許可されたという。ニホンサルがどのようにに生息し、行動しているかの調査もされなままに、邪魔者はただちに除去せよ、という態度にはあきれられるばかりである。

残念なことに、奥多摩には野生動物の保護センターも調査研究を専門に行う公的施設もなく、野生動物の被害に対して単純に有害鳥獣駆除を繰り返しているだけである。大きな問題が起らないと、調査費もつかない状態であると聞く。



写真-3 定点調査の様子

私が調査を始めた時点では、野生動物を調査、研究している仲間はほとんどいなかった。ところが最近では、ツキノワグマやニホンサル、ホンシユウジカ、ムササビ、タヌキなどを調査している民間の組織や人が増えてきた。毎年実施している野生動物ウォッチングの行事にも、定員三十人のところ、二十代の人たちを中心に百人を超える応募が寄せられる人気ぶりである。

このような、NGO(※1)が行っている地道な活動や得られた情報が、今後の野生動物保護行政、野生動物と私たちとの共生のためぜひとも活用していただきたいものである。

また、①野生動物の現状の調査・研究、②野生動物との共生(食害と産業との関連、その対策)、③傷病動物(鳥獣)の対応、④野生動物を素材とした環境教育(野生動物保護教育も含む)などを実践する行政施設(「自然保護センター」「鳥獣保護センター」:専門官が常駐、あるいは運営は専門の民間団体に委託してもよいのではないか)が一日も早く整備されることを願ってやまない。

(※1) Non governmental organization 民間団体
(※2) 自然教育研究センター

山と博物館第40巻第12号

発行所 千歳長野県大町市 TEL 0271-2211
印刷所 長野県大町市 大町山岳博物館
定価 年額 一、五〇〇円(送料共(切手不可))
郵便振替口座番号 〇〇五四-〇七三三九三